

烙印の姫巫女DL9

RAKUIN NO HIMEMIKO

DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購読・閲覧禁止

presented by

STUDIO WALTZ

姉妹のソープ奉仕

んふ

「あの時も、『うだったのか?…麻衣』
「そ…それは…」
そう、あの時。

麻衣にとって忘れることができない記憶である。
地上に出現した平安京で麻衣は処女を失った。
淫ら木馬によって膣と尻穴を貫かれ、あるところか絶頂失神してしまったのだ。

んん

麻衣はあの時と同じ格好(コスチューム)をさせられ、同じ体勢で入れられていた。

男の言葉巧みな誘導に、麻衣はあの時のことを洗いざらい喋らされた。

膣と尻の穴を同時に犯された絶望感。

両穴で暴れる肉デイルドの感触。

あまりの快感に耐えきれずに、イッてしまったこと。そして麻衣は自らの言葉に興奮した。

「思い出して、締めつけるとは…」の淫乱め!」

「…淫乱なんかじゃ…ない…です」

回では抵抗しても、身体はどうしようもなく反応してしまふ。あの時の記憶が鮮明によみがえり、麻衣の腰が自然にうねり始める。

（ああ…私…淫乱なのかも…）

麻衣は頬を染め、大いに乱れた。

何人もの男へ奉仕を強制され、それが麻衣の中で自然な流れで快樂へと繋がってしまう。

（私…どうなってしまうの…）

際限もなく坂道を転がり落ちていくような不安。しかし、それもやがて身体中に響き渡る快感にかき消されてしまふのだった。

無論、別室では亜衣が同じく客をとらされていた。
男嫌いの亜衣を知る男どもは揃ってその変わりよ
うに舌を巻いた。

本当にあの天津亜衣なのか？

何があった？

チ●ポに負けたのだな…

身体の芯まで男の味を教え込まれたのだな…

これが人質をとられての行為であることは容易に
想像がつく。

しかし、本当に強制されてやっているのか？

そう思えるほどの献身的な奉仕なのである。

亜衣も本当のところはもう分からなくなっていた。
強力な淫術がこの部屋が、あるいは自分の身体に
かけられているのかもしれない……。

ただ胸を揉み込まれ、舌を絡められると、もう
否応なしに身体が反応してしまう。

今まで無数の男どもそして鬼どもに不当な快感を
身体の隅々にまで刻み込まれてきた。

その都度、亜衣は夢中で相手にしがみつき、腰を振
り立てて、子宮で精液を味わった。

たくましいペニスの脈動を想っただけで、濡れた膣が
もの欲し気に震えるのだ。

亜衣はつばを飲み込んだ。

今、自分の手の中にあるペニスが愛おしくなってく
るのを抑えることができない。

(ああ……なんて、熱いの……)

亜衣の口からはさらに甘えた声が漏れ、ペニスを優
しく包む手の動きはより淫靡なものになっていった。

カーマ淫邪王編

ホト魚によって梅の護符を失った亜衣は幾多の危機を乗り越えて守ってきた処女をカーマに奪われた。

「はーはっはっ！ついに亜衣を犯してやったぞ！」

カーマは狂喜して、いきり立った肉棒で亜衣の膣を存分にかき回し、淫界の怨念が練り込まれた濃厚な精液を子宮に吐き出した。

ドビュルルル！

「はあ……ぐうあ……うう……」

初めての挿入、そして初めての中出し。

涙ぐむ亜衣を見下ろしながら、カーマはニヤリと回

元をゆがめ、再び腰を動かし始めた。

膣を中心にガクガクと身体を揺さぶられる。

（な……に……終わりじゃない？……ま、まさか？）

亜衣は、男は射精したら終わりだと思っていた。

カーマの精液と亜衣の愛液でグチヨグチヨにぬかるむ膣をかき回されるのだ。

いちだんと卑猥な水音が響く。

いつしが猿ぐつわも外れ、亜衣は回をういて出る

艶めかしい声を噛み殺さねばならなかった。

ようやく膣肉もほぐれ、ペニスの形と動きをはっ

きりと味わうこととなった亜衣。

セックスの地獄は始まったばかりだった。

カーマ3発目

ゼン

ボタ

ボタ

ボタ

ボタ

はあ...あ

あーん



カーマ4発目

正常位で出され、バックで出され、亜衣はその場で崩れ落ちた。粗い息を整えることもできず、膣から精液を垂れ流し、突っ伏している。

「ハア…ハア…ハア…」

いまだ身体に力の入らない亜衣をカーマはむりやり引き起こし、自分の身体の上に乗せた。と同時に、割り開かれた亜衣の股間にペニスが突き立てられる。

「うあああ…ああああ！」

満足に抵抗もできないまま一気に奥まで挿入された。

下からの猛烈なピストンに両腕を拘束していた羽衣もゆるみ、やがて外れてしまった。亜衣は腕が自由になった。

しかし自由になった(攻撃にも使えるはずの)手で、

亜衣はとっさに口を覆った。いやらしい声が止まらない。

(はああっ…どうしよう…また…イ…イク)

亜衣はギュツと目を閉じた。耐えられないと思った。

全身の震えが止まらない。これまでもとは違う何かが来る。

(な…なに…、な…んな…の?)

そして亜衣の限界はあっけなく訪れた。

その瞬間、亜衣は今まであげたことのないような悲鳴をあげ、盛大に潮を噴いていった。

「ああ…か…はあ…あ…ふうああん…」

ビクンビクンと腰が痙攣している。

亜衣の意識が飛びそうになる。

亜衣は失神する瞬間まで自分が悦びの顔を晒している事に気付かなかった。



姉妹の敗れた世界

姉妹は処女を奪われ、羽衣はその強大な神通力を失った。
形状こそ保っているものの、今の羽衣の装束は凌辱者たちを喜ばせる為の単なる装飾品にすぎなかった。



ん

げう

(苦しい…)

喉奥にペニスが容赦なく突っ込まれる。
しかし麻衣の心を支配しつつあるのは
もっと別の感覚だった。

(苦しい…はずなのに…こんなのに…)

あ

ほぐれた柔肉をかき分けて身体の芯を突き抜ける衝撃に麻衣は追い詰められていた。

苦悶の声の間に、どうしようもなく甘い吐息が混じり始める。

「ふ……ふんふん……ふんふん」

鬼のピストン運動からなんとか逃れようと振られていた尻にも変化が現れていた。

「今や、鬼の腰の動きを受け止めようとしているかのうように妖しくうなっている。」

「あん……うあああ」

もう膺の昂ぶりを抑えることができない。

（お……お姉ちゃん……「う……うめん……なぞ……い」）

麻衣は最愛の姉に詫びた後に、エクスタシー

への最後の一步を自ら踏み出していた。

うあ

D・N・Aの記憶

時空の歪みにとらわれた亜衣と麻衣がたどり着いたのは、千年前の京の都だった。

藤原時平が召喚した強力な怨霊たちが姉妹に襲い掛かる。
亜衣は三体の怨霊に口と膣と尻穴に男根を入られていた。その激しい出し入れに、快樂の地獄に堕とされる寸前である。

亜衣の傍らでは、麻衣が組み敷かれて犯されていた。

麻衣に覆いかぶさっている怨霊の腰の動き、そして麻衣の腰の動き。

(な……中に出されてる……ま、麻衣いい……)

麻衣の身を気遣う亜衣であったが、同時に自身の穴にねじ込まれたペニスも次々と魔精を放ち始めた。

ビュルルルル・ビュビュードビュー

「ぶぐぐぐぐぐぐ」

熱い奔流に声にならぬ悲鳴を上げる亜衣。

萎えることのない肉棒は精液でドロドロになった亜衣の中で再び動き始めた。

「くっくっくっくああー!」

もはや麻衣を気遣う余裕はない。亜衣も自らの愛液を噴き散らして悶え続けた。

全天を覆う異様な雷鳴。

そこに舞い狂うのは、非業の死をとげた道真の怨念だ。狂気を帯びた雷は大地を揺るがすほどの轟音だった。すでに亜衣も麻衣も怨霊たちの精液まみれである。

身も心も犯される姉妹の運命は…



道真公、私たちをお見捨てになるのですか

姉妹の敗れた世界2

鬼獣淫界の支配する世界は女にとって過酷な世界であった。

天神学園は性の監獄と化した。

学園に携わる男どもが一斉に生徒や女性教師陣に襲い掛かった。

学園のあらゆる場所で女の悲鳴が響き渡った。

ああ

は

も……もう

これ以上は……

特にその美貌が広く校外にも知れ渡っている桜井、飯島の二人は寝る間もないほどに男どもの慰みものとなった。

二人は少しでも生徒たちを救うべく、自らおとりとなって男どもを引き付けたのだ。

（……の子たちだけは、守らなければ……）
だが淫らの瘴気に狂った男たちの欲望は凄まじく、その熟れた肉体はひとたまりもなく飲み込まれてしまふのだった。

飯島涼子はその日理事長室で犯されていた。

でっけい太った理事長に呼び出されると、そこには数人の他校の男子生徒たちがいた。聞けば彼らは皆童貞であるという。

涼子は命じられるままに下半身を丸出しにして寝そべっている生徒にまたがり、すでに勃起しているペニスを自らの肉孔にあてがった。

（ああ…私、また…こんなこと…）

下唇を噛みながらゆっくりと身体を沈めてゆく。

「うう…ああ…こ、これって…」

思ったよりもペニスが大きい。

その生徒は初めてのそれも極上の感触に狂喜し、

ぎこちないながらも腰を振り立て始めた。

理事長は他の生徒にもズボンを脱ぐように言った。

「さ、飯島先生が口でしてくれるそうだよ」

健気に上下の回で生徒を射精に導く女教師の姿に興奮したのか、理事長自身も取り出した魔羅をしごきながら近づいてきた。尻の穴が空いている。

気付いた涼子が生徒のチ●ポを咥えたままイヤイヤをして訴えたが、理事長は慣れた手つきで尻穴に亀頭をあてがった。

圧をかけるとめり込んでゆく。

「~~~~~!」

涼子は声にならない悲鳴をあげた。

しかしすぐにその身体に連日仕込まれている肛悦がよみがえってくるのだった。

三穴を犯され悶える飯島涼子。

これが天神学園の日常の風景となりつつある。

やがて三つの穴で一斉に射精が始まった。

女の甘く蕩けた悲鳴が理事長室に響き渡った。

姉妹の敗れた世界3

姉妹の敗れた世界とはつまり鬼獣淫界の淫らの気が充満した世界である。

そこでは今まで無念のうちに散っていった鬼どもの怨念がすべからく神の奇跡の祝福を受けた。

鬼どもははより強大な力をみなぎらせ次々とよみがえったのである。

松笠法師などはその最たる例であった。

「ぬっああー！姉妹はどこじゃあー！」

逆に姉妹はと言えば、純潔を失い羽衣軍神の力はすでにない。

太刀打ちできる相手ではなかった。

「さあ、たっぷりかわいがってやろうぞ」

松笠法師は手始めにフェエラを強要した。

多くの人質がいるため姉妹は従うしかない。

「お姉ちゃん…」

「麻衣…」

いきり立った魔羅に服従の誓いとキスをさせ、

タマはおるか尻の穴まで丁寧に舐めさせた。

（ああ…こんなとまで…）

（耐えるのよ…麻衣…）

そして姉妹どちらかの口の中に出し、飲ませ、

Wフェエラでお掃除させ、これを繰り返した。

「亜衣、あの時のことを覚えておるか？」
松笠法師は亜衣を抱きあげながら言った。
あの時とは、鬼夜叉童子とともに姉妹を鳥居に
はりつけにした時のことである。

亜衣はややうつむいて口の中のつばを集め、
松笠法師の舌の上に垂らした。
「お……お姉ちゃん……」
頬を染める麻衣。しかし、「これは姉を氣遣っ
ての言葉ではなかった。
亜衣の変質的な行為に興奮したのである。
松笠法師は舌の上に滴ってくる亜衣のつば
を飲み込んだ。

「ワシはあの時のお前のつばの味が忘れられん！」
松笠法師が長い舌を突き出した。

「さあ、出せ」

「ああ……そんな……松笠法師様……」

鬼獣淫界の瘴気の中、長く続く凌辱で亜衣の思考
はすでにドロドロにただれていた。
亜衣はわずかに口を開いた。

「くく……、「これじゃ、「これじゃ」
ツツー。ポタポタ。

「さあ、もっと出せ！」
喉を鳴らして亜衣のつばを飲み干した。

やがて松笠法師は待ちきれぬといった風に舌
を上にも伸ばしていった。それは亜衣の舌まで
達し、「二つの舌はナメクジの交尾の様に絡み
合った。

「も…もう、許して…イ…イク…イッちゃっっっ！」

「いいや！許さん！」

松笠法師は麻衣の身体をさらにきつく抱きしめて言った。

「羽衣の天女の矜持をもって耐えてみせよ！」

「はっっっぐううう…あううううう！」

麻衣は齒を喰いしばった。

「天津の女どもがド淫乱でないと示してみせい！」

これ以上ない言葉で罵られるが、麻衣にはもう抵抗する術はなかった。

破滅が少し先に延びるだけである。

（も…もう…ダメ…）

涙目で許しを請う麻衣。

「くくく…いい貌をする！」

松笠法師はいよいよラストスパートに入った。

込み上げる射精感に身を任せ、乱暴なピストンに麻衣の身体がガクガクと揺さぶられる。

麻衣は懸命にしがみついた。

松笠法師の肉棒が一気に膨れ上がった。

「おおおおおお！」

「はきゅっっっ！」

松笠法師が吠え、麻衣が応えた。両者は同時にイッた。息の合った会心のセックスと言っている。

鬼の射精はとどまることがなかった。

松笠法師はなおも腰を振り続けた。

イキ肉を絶妙にかき回され、麻衣は声にならない悲鳴をあげた。

プンヤアアアアア！

潮を噴き散らし、麻衣の意識は絶頂のさらに上へと舞い上げられた。

続・夏の淫獄 妄想虜囚



亜衣のもとに届けられた1枚のDVD
そこに映る少女は本当に麻衣なのか？

周到な理詰めの攻略…
鋼の精神力を誇るあの姉が堕ちる？
囚われの妹を救い出すことができるのか？

紅の巫女は淫獄へと囚われた。
双子の妹に起きた惨劇を姉はまだ知らない…。

姿を見せぬ卑劣な敵に、敢然と立ち向かう蒼の巫女。
たとえどんな罠が待ち受けていようととも退く姉ではない。
だが、淫敵の計略は彼女の想像を超えて遠大だった。
天女の血を受け継ぐ美身は翻られるためにあるのか…。

「しゃぶって貰えるよな」
「こんな所で…」
「こんなところだからだろ」
リモコンで強弱をつけながらローターを振動させられ、亜衣は源蔵の要求に屈する。
ズボンのファスナーを降ろし、勃起していた魔羅を取り出すと亜衣は舌を這わせた。
(早く終わらせないと)

車を停めた場所は袋小路になっていて、人通りも少ないが住宅街の只中であることは変わりない。
速やかに源蔵を射精に導かねば、付近の住民に目撃されてしまう。

「昨日教えたように丁寧にするんだ。ただ抜けばいいなんてのは下品な女のことだぞ。じっくり腰をすえて、感謝の気持ちをこめて奉仕しなさい」

何もかもお見通しの源蔵に機先を制される。
手っ取り早く済ませようなどとはいかないようだ。

亜衣は亀頭に挨拶のキスをする。
舌に唾液をたっぷり乗せ、柔らかな舌腹を使って陰茎に唾液を塗りたくる。
何度も陰茎に舌を往復させ、やっと肉棒を啜えることを許された。
母校のグラウンドからは部活に励む生徒たちの声が、校舎からは吹奏楽部の演奏が聞こえる。
ためらいはあるが、奉仕の手を緩めれば長引くだけだ。
亜衣は魔羅を啜え、陰茎に唇を滑らせた。

「続・夏の淫獄」は
FANZA、DLsiteにて
好評配信中！

淫宴玩弄上・下 妄想虜囚

上巻 性開発される処女巫女姉妹
下巻 軍門に降る双子巫女戦士

戦士として目覚めたばかりの巫女姉妹。
新たな刺客が処女天女を狙う。
狡猾な罠に誘った処女花がはかなくたゆたう。
もはや姉妹の初花は摘まれるのを待つばかり。
処女巫女姉妹が快感を教え込まれ蕩けていく。
退魔の使命があるというのに…。
こんなこと知りたくなかった、私たちまだバー
ジンなのに…。
ここまで処女が乱れ狂うのか。双子巫女が姉も
妹も男の手管に負けて淫らに染まっていく。

「もっと口を吸わせろよ」

光平がシロリと見ながら言う。光平の言葉には人従
わせるなにかがあるのだろうか。

麻衣が後ろを振り向くと、まだ口を被せてきた。舌先
を捉えられチュウと吸われてしまう。

「光時さんやめさせて」

助けを請うが、光時は麻衣の声に応えない。

（どうしてなの？ 光時さんが相手なら恥かしいことだっ
て耐えられるのに）

まるでこれでは兄弟で共有されているようではないか。
唇ばかりか乳房だって好き放題に揉みだかされている
のに光時は助けようともしてくれない。

「兄貴はお前のことに夢中なのさ。ほら、どこにキスさ
れてるんだ？」

そんなことは乙女に言えるはずもなかった。

紺の袴が脱げかかっていた。

白無地の飾り気のない清楚なショーツが降ろされ、両
膝のあいだでアーチを作っている。

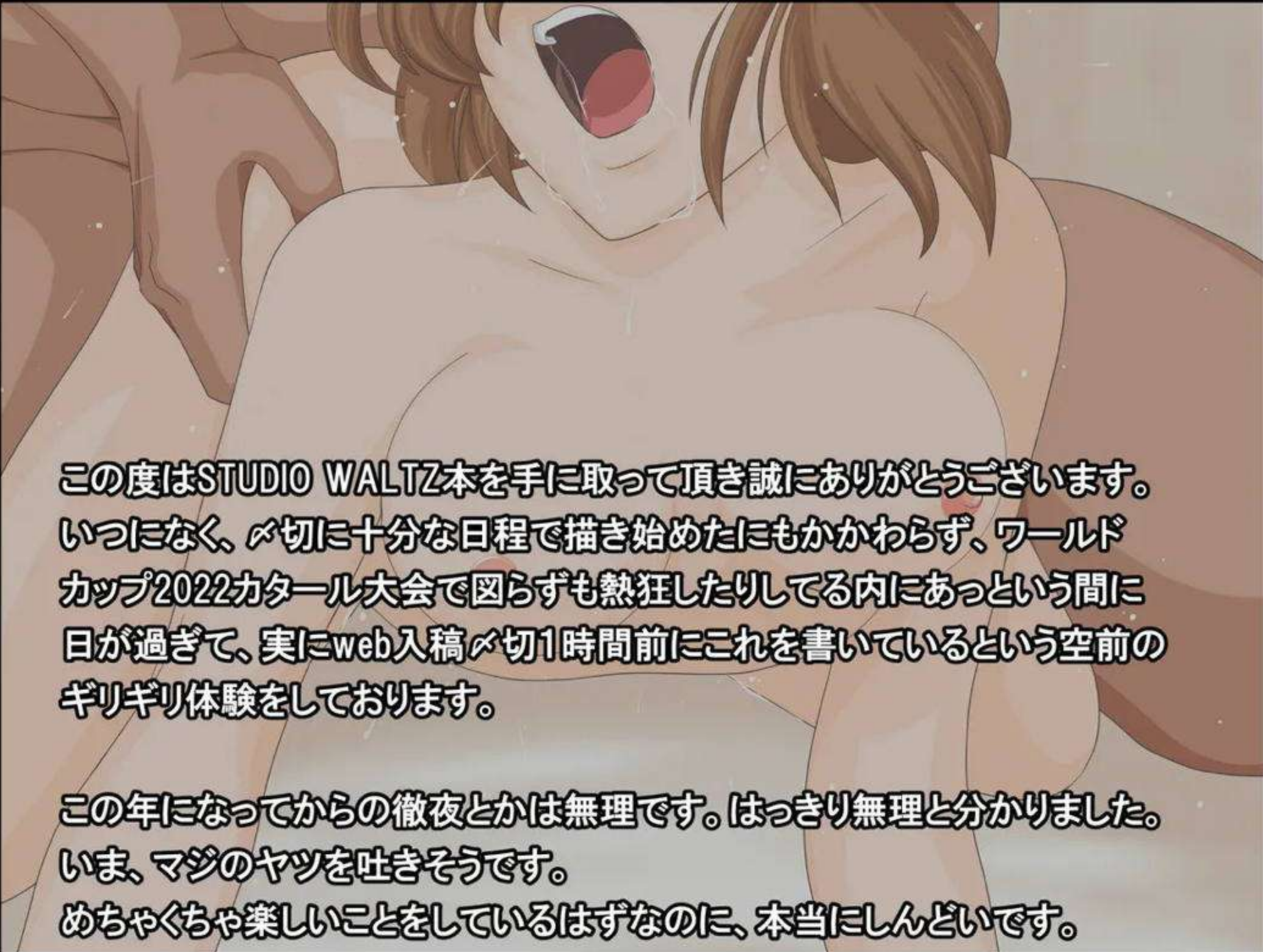
伸びた股布には花びらが付着していた。

むき出しになった下腹を丹念に光時は舐めている。
麻衣が悲鳴を上げ、助けを求めても一言も発せず繰
り返し舌を這わせていた。舌遣いは柔らかいが腰はがっ
しりと掴まれ微動だにしない。
「アァン、ダメです。そんなところ…あんっ」
おとがいをのけぞらせて麻衣は反応した。

淫獣聖戦創作小説
妄想虜囚作品

「夏の淫獄」
「続・夏の淫獄」
「淫獣愛牢」
「淫宴玩弄 上下」

FANZA、DLsiteにて
好評配信中！



この度はSTUDIO WALTZ本を手にとって頂き誠にありがとうございます。
いつになく、必切に十分な日程で描き始めたにもかかわらず、ワールド
カップ2022カタール大会で図らずも熱狂したりしてる内にあっという間に
日が過ぎて、実にweb入稿必切1時間前にこれを書いているという空前の
ギリギリ体験をしています。

この年になってからの徹夜とかは無理です。はっきり無理と分かりました。
いま、マジのヤツを吐きそうです。
めちゃくちゃ楽しいことをしているはずなのに、本当にしんどいです。
でも、めちゃくちゃ楽しいので、やはりやめられませんね。

さて、淫獣聖戦ファンの皆様、本年も大変お世話になりました。本当にあり
がとうございました。

また、妄想虜囚様、すばらしい聖戦激エロ小説の一部分の使用をOKして頂き、
誠にありがとうございます。めっちゃエロいです。ホントに何回も読んでます。

それでは、来年が皆様にとって素晴らしい一年となりますよう心よりお祈り申し
上げます。

またお会いできる日を楽しみにしております。

イラスト(文・セリフなし)&
仕上げ案ラフなど

